TOP Interview
トップインタビュー
第10回

聞き手／矢吹光一
一般財団法人とうほう地域総合研究所 理事長

宗像窯

300年続く文化の継承者、継なぐものと継ながれるもの

1．宗像窯の歴史

矢吹●宗像窯のご先祖様は元々福岡県の宗像大社のご関係者で、767年に布教のため会津に移り住まれたのですか。

利浩●そうですね。九州から東北へというと遠いイメージですが、当時会津は大和政権とも繋がりが深く、文化が栄えていたため近く感じたのではないでしょうか。

矢吹●こちらにいらしてから約千年後の1719年に宗像窯を創業されて、そこから約300年間代々続けてこられて利浩さんで８代目になる訳ですが、これだけ長い間脈々と繋がれてきた秘訣についてお聞きしたいのですが。

宗像窯 八代 宗像利浩さん

利浩●まずは、後継者になるには向き不向きや、ある程度の技術が必要になるので、必ずしも長男が引き継いできたわけではなく、婿を取った時期もありました。私の父の場合、本当は野口英世を目指して医者になりたかったのですが、結局、両親の姿を見て少しでも役に立てたらと思って継いだのではないでしょうか。私が思うには、宗像窯が豊かで順調だったら、父は医者になったかもしれませんね。

矢吹●伝統工芸は文化の継承ですから、誰でもできるものではないと思いますが。

利浩●そうですね、今と違って５代目以前は最低限度の技術が必要だったので、本当に不器用な人はもうその時点で違う道へ進まれたと思います。

2．ご経歴（利浩さん）と伝統の継承について

矢吹●利浩さんは京都の嵯峨美術短期大学へ進学されましたが、それはご自身が窯元を継ごうと思って進学された訳ですか。

利浩●京都に対する憧れや、小学生時代の恩師で京都外語大学創立者の森田先生※と縁のある方の勧めもあり、県立会津工業高校（窯業科：現セラミック化学科）から推薦をいただいて進学しました。私は、どうしても大学に行きたいというまでの気持ちは無かったのですが、一方で実家を出たいという気持ちがあって、大学進学がいいチャンスになりました。まだ、当時は焼き物で何とか食べていける時代だったのと、兄妹も妹二人で男は自分一人だったので、父の姿を見て自然と後を継いでもいいだろうなと思っていました。

※京都外国語大学：会津出身の森田一郎、倭（しず）文子夫妻により前身の外国語学校として1947年に発足。「言葉を通して世界の平和を」を建学の精神とし、「不撓不屈」を教育・研究の基本精神としている。

矢吹●大学卒業後、島根県出雲の出西窯で３年間修業されましたが、どういう理由で行かれたのでしょうか。

利浩●家から離れたところで修業をしたかったことと、出西窯の代表の方と父が知り合いで、「行ってみたらどうだ」と勧められたので、迷わずに行きました。そこは「柳 宗悦」※と関係が深く、民藝運動の方がよく出入りし、時々哲学者の山本空外上人が講演に来られるような窯でした。そこで、今も覚えていますが、「河井寛次郎」※の「仕事のうた」から「仕事が仕事をしています」を毎朝、復唱したり、空外上人からは「自分が作るのではなく作らせていただいている」と教わりましたが、若い頃は自分のものを作りたいという気持ちが強かったですね。今になってその意味が少しずつ見えてきました。

矢吹●その意味がわかり始めたのはいつぐらいからですか。

利浩●そうですね、20代の終わり頃に「井戸茶碗」※に触れてからですね。井戸茶碗は奥に潜んでいるものがあって、冷たいお茶が入っていても持った瞬間に温かく感じるような五感で感じるものがあるのです。それは目に見えない部分ですが、技術以外にそういう目に見えないものが作品に含まれているのです。

矢吹●経験の積み重ねで見えてきたのですか。

利浩●修業先から帰ってきた頃は、自分を高めようともがいていました。自分のものを作ろうと思っていろいろなことをやりましたが、父から与えられた「なんのてらいもない作品」を作るのさえ難しい状況でした。自分は何者なのかということさえ分からなくなるくらいでした。しかし、作陶を続ける中で多くのご縁を頂くうちに、徐々に意識が変わって前向きになりましたが、悩みは多かったですね。

※柳 宗悦（1889～1961）：日本の美術評論家、宗教哲学者、思想家、民藝運動の主唱者。民衆の暮らしの中から生まれた工芸の美しさに着目し、1936年に日本民藝館を設立。
※河井寛次郎（1890～1966）：日本の陶芸家、随筆家。柳 宗悦、濱田庄司とともに民藝運動で活躍。
※井戸茶碗：高麗茶碗の一種で、日本の茶道具としての呼称。茶碗の王者ともいわれている。

江戸中期に造られた登り窯が東日本大震災で被災しましたが「宗像窯登り窯再生プロジェクト（代表 大塚孝義氏）」が立ち上がり修復され現在に至っております。

矢吹●その頃、お父さんは現役で仕事をされていたのですか。

利浩●父は第一線で隆盛を誇っていました。今は、父のプレッシャーがあって良かったと思いますが、当時はもの凄いプレッシャーがあって窯元を引き継いでも父の存在が大きく私が代表というイメージはなかったような気がします。その後、父は二年前に亡くなりましたが、やっぱりなんでも理解してくれる親だとお互い成長しないような気がします。

矢吹●お父さんとはいろんな話や、焼き物技術について意見交換をされたのですか。

利浩●勿論そうですが、どちらかというと父の後姿をきちんと見られたのがありがたかったですね。父は医者を目指したくらいですから、成績も優秀で会津中学（現会津高校）に進学しましたが、家を継ぐからと途中で辞めました。そのときの苦しみは大変だったと思います。しかし、父が家を継いでくれたおかげで、今の私があるような気がします。

矢吹●お母さんも相当ご苦労されたそうですね。

利浩●当時は、問屋さんと分業して窯元が自宅で作品を売ることは、ほとんどなかったのではないでしょうか。そのため、母は自分でお客様を開拓して引き寄せていました。父は仕事がきちんとできたので、母と両輪でしっかり伸ばしたのだと思います。

3．日本社会の変化と会津の伝統工芸・文化について

矢吹●伝統文化の運営や継承は我々も興味があって、地域全体で取組むべきと思っていますが、社会やライフスタイルの変化もあり、必ずしもうまくいっているとは言い切れない状況だと思います。そういう中で、ご子息に継承される上で何を大事にしていらっしゃいますか。

利浩●宗像大社の末裔であることに誇りと慎みを持ち、会津本郷焼が産地として栄えた理由（条件の良い原料や水等が揃っていた）と、付加価値創造の重要性を伝えていくことです。今だけを見ないで、土の力は無限大でその本来の力を如何に引き出すかということでしょう。

矢吹●業界で若い作家さんを育てる取組みはされていますか。

利浩●地域おこし協力隊で来られた方が初めて、本郷焼をやりたいと会津美里町の旧本郷地域に窯を開きました。会津美里町の風土が好きになって、そこを拠点として作陶したい、そういう人が出てくる時期になってきたのですかね。これからですね。

矢吹●地元の皆さんは、受け入れに前向きで、これを事業化しようという考え方はあるのでしょうか。

利浩●私は、外部の方と提携すると共に、会津美里町の地域全体で本郷焼の価値を共有することが大事だと思います。よく本郷焼の特徴について聞かれますが、今は世界が近くなっているので、日本の焼き物が注目されている時期でもあるのですね。世界的に日本の焼き物は一定の評価を得てますから、日本独自のものをきちんと作れば勝負できると思っています。

4．陶芸家を目指す人たちへ伝えたいこと

矢吹●若い人で作陶される方は、たくさんいらっしゃると思いますが、そういう方たちへ何か一言メッセージをお願いします。

利浩●焼き物は「一焼き、二土、三細工」と言われますが、一般的には技術を一番に捉える意見が多いのですが、結局大事なのは初めにどういうものを作りたいのかという想いを持つことなんですね。技術はある程度頑張れば進歩しますが、作品に対する明確な想いが無ければ本当の価値は生まれないということです。

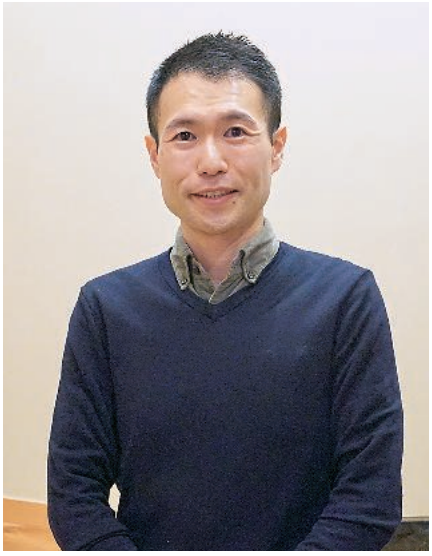
宗像利浩さん（左）　矢吹理事長（右）

矢吹●ありがとうございました。

1．ご経歴について

矢吹●東京都立短大を卒業されてから京都伝統工芸専門学校へ進学されたそうですが、どういう理由だったのでしょうか。

利訓●将来陶芸の道に進むのであれば、なるべく早い段階で陶芸の技術を学ぶことが大切だと考えていました。そのため、地元の国立大学にも合格しましたが、20歳から陶芸の道に入ろうと思い、また以前から海外の文化にも興味があったため、東京都立短期大学の文化国際学科に進学しました。卒業後すぐに、弟子入りの修行の道も考えましたが、京都に伝統を重んじながら、実技のカリキュラムが充実した学校があり、また京都であれば、陶芸以外の日本の伝統文化にも広く接する機会も多いのではないかと思い、京都伝統工芸専門学校に進学しました。



宗像利訓さん

2．伝統の継承と革新について

矢吹●家業を継ぐ決心をされたのはいつ頃だったのでしょうか

利訓●物心ついた頃から、周囲の反応で、ぼんやりと将来は家業を継ぐだろうと思っていましたが、決心がついたのは高校生の頃に進路を決めた頃です。また当時から、祖父や父が熱意を持って焼き物作りに取り組んでいる様子を身近で見ていたことも影響が大きかった気がします。

矢吹●伝統技術をベースに、新しいアプローチをする取組みについてお教えください。

利訓●温故知新という言葉があるように、過去の物事や歴史を研究し、そこから新しい知識や見解を得ることはとても重要だと考えています。伝統工芸は、その土地の風土や文化と密接な関係があり、長年に渡り受け継がれている技術が用いられています。私も祖先から代々受け継がれてきた伝統の技術を受け継ぎながら、時には新しい技術も取り入れて、時代に合わせた作品作りに取り組みたいと思っています。過去には京都で学んだり、若い頃、全国の様々な産地の陶芸を見たりして、これまで知らなかった技術や作風に感銘を受けた一方で、会津の風土の中で育まれてきた独自の魅力にも気がつきました。例えば、自然灰を原料にした釉薬もその特徴の一つです。この釉薬では、独自の光沢や、流れるような複雑なグラデーションの美しさが特徴です。また宗像窯で代々使用してきた的場陶土にこの釉薬を掛けることで、この土が持つ温かみと力強さが加わります。私も、そんな宗像窯の伝統技術が生かせる作品作りをしたいと思っています。

自分の作品の特徴について、いくつかご紹介したいと思います。

翠彩は宗像窯伝統の緑釉を改良した釉薬です。この釉薬では、冬の雪景色から、春が訪れてやがて新緑に染まる会津の自然の移ろいの情景を表現しています。

掛分は、違う釉薬をそれぞれ掛け分けて施釉する技法です。私の場合、翠彩と鉄釉を掛分しています。複数の釉薬が混じり合う箇所では、さらに複雑なグラデーションが生まれ、また翠彩の美しさと鉄釉の重厚感が表現されています。

翠彩掛分肩衝花瓶
宗像利訓作

朱彩は、宗像窯には元々あまりなかった赤い釉薬ですが、以前から中国の古い陶磁器などを勉強する中で、宗像窯の伝統技術を応用すれば、赤の発色は可能ではないかと思い挑戦しました。赤い色は、人類が最初に認識した色の一つと言われており、また生命力を象徴する色ともされています。朱彩では、人が根源的に感じる赤の色彩のエネルギーを込めながらも、趣深い作品作りを目指しています。

矢吹●以前、師匠であるお父さんが利訓さんとの会話の中で「ひらめきを感じることが多々ある」と話されましたが、作家同士の会話から化学反応のようにひらめきやアイデアが生まれたのでしょうか。

利訓●今でも、日頃仕事をする中で、父から学ぶことは大変多いです。また、同じ陶芸の仕事をしていますが、世代が異なりそれぞれの考えや個性もあるので、自分とは違う視点からの発想に気づきがあったり、普段の何気ない会話からヒントやアイデアを得る事は多い気がします。

矢吹●一般企業の事業承継とは違うかもしれませんが、気を付けていることや、作家ならではのご苦労についてお教えください。

利訓●会社の事業承継と同時に、伝統の技術も受け継がなければならないため、今後は双方をよりバランスよく行わなければならないと思っています。また、ここ数年の国内の状況や海外の日本の伝統工芸への関心の高さなどを考慮して、これまでのお客様を大切にしながら新たな客層にもアプローチしていければと思っています。作家ならではの苦労は、伝統を受け継ぎながら、その人自身の精神性や個性が表れる作品が求められることです。例えば、ギャラリーなどで個展を開く際には、個展のテーマを決めたり、前回とは違う作品作りに努めることもあります。そのような大変さもありますが、窯出しの際に、自分が満足のいく作品が出来上がった際には、非常に大きな達成感があります。

矢吹●外形的には非常に円滑にしっかりと事業を繋がれている感じがしますが、それはお父さんが息子さんに対する慈愛ということだけではなく、一人の人間として、作陶家として認めているからでしょうね。一方で、これから工房を更に繋いでいく中で、大事にしたいことや後継者として気を付けたいことはありますか。

利訓●父や祖父もそうですが、これまで多くの方々と様々なご縁をいただいてきたので、そういうご縁は今後もとても大切にしていきたいと思っています。

矢吹●お父さんは、偶然な出会いや見えないものに生かされている感じがすることについて話していますが、お父さんやお爺さんやその先のご先祖様から繋がっていると感じられることはありますか。

利訓●仕事をしている中で、そうした繋がりを感じることは多いです。代々受け継がれてきた伝統の技術や精神はもちろんですが、今、お付き合いいただいているお客様の中には、私がお会いする以前から宗像窯と親交があり、応援してくださる方が大変多いので、そのようなご縁にとても感謝しています。

3．伝統工芸の未来について

矢吹●日常的な器や食器に根差した芸術性についてお教えください。

利訓●器に美しく盛り付けられた料理はとても美味しそうで魅力的であり、料理の芸術性を高めます。また、陶器は視覚での見た目の美しさだけでなく、器を直接手に持って触れることによる触覚の芸術性も備えていると思います。触覚は五感の中でも最も原始的な感覚とも言われています。近年では、アート作品に直接手で触れて楽しむ展覧会も開催されているようです。作品を観るだけではなく、さらに直接触れて質感を楽しめることが器の醍醐味ではないでしょうか。また、その器に内在するエネルギーや存在感を感じ取ることも大切だと思います。陶器は一般的に温かみのある質感を持っていると言われていますが、これは陶器の素材である土の有機的な部分に我々人が無意識に共鳴しているのかもしれません。陶芸の作品を作る際には、しばしば土と向き合うという言い方をする場合もあります。器に料理が盛り付けられることで、その空間が温

かみのある和やかな雰囲気になり、楽しく思い出深い食事ができたり、酒器で晩酌をした際に、お酒がより美味しく飲めて、日頃のストレスから解放されたり、自分自身と向き合う時間が持てたりします。そんな陶器の器が日常で身近にあることにより、その人の人生を少しでも豊かにする手助けになればと思います。

矢吹●伝統工芸に限らず本来あるべき芸術教育とはどのようにお考えですか。

利訓●芸術を鑑賞することにより、心理的なストレスが軽減される上に、深い洞察力や審美眼が養われ、直感力が鍛えられます。また様々なアートに触れることにより視野が広がります。一方、アート作品を制作する過程では、自ずと自分の内側なる声に耳を傾けて、自分自身と向き合う機会になり、創造性が育まれます。また作品を完成させ、それが評価される経験は、その人の自己肯定感を高め、さらに挑戦する意欲が増すことにもつながります。芸術と接することが、人間性の形成にも大きな影響を与え、その人自身の成長につながることが大切だと思います。

4．陶芸家を目指す人たちへ伝えたいこと

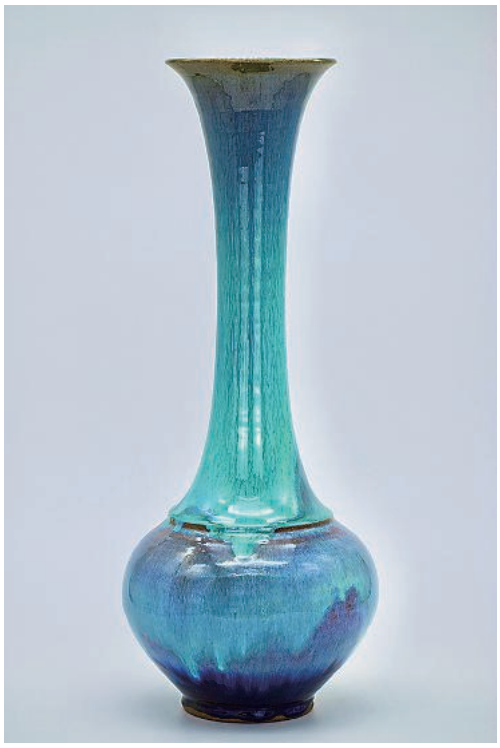
矢吹●窯元の後継者の立場から、陶芸家を目指す人たちを励まし、背中を押していただくような言葉（エール）をお願い致します。

利訓●海外でも日本の文化に人気が高まる中、陶芸をはじめ日本で長く受け継がれてきた伝統工芸にも関心がとても高くなっています。海外での個展や展覧会で現地の方と交流すると、日本に関心を持った方が多く、そんな日本の伝統工芸の仕事に携わることができることを誇らしく感じる時があります。また、科学の発展により機械化が進み、合理化が進む一方で、私たちは人の手から生み出す手仕事のものに、より価値を見出すようにもなってきています。また作品が完成するまでの制作過程や、どのような場所でどのような人が、どのような思いで制作しているのかという、背景のストーリーも重要になってきた気がします。厳しい時代ではありますが、このような時代だからこそ、その土地に代々受け継がれてきた伝統工芸の仕事は、そこにしかない独自性があり、やりがいも感じると思います。

矢吹●ありがとうございました。

東大寺第224世別当　橋村公英様がご揮毫された
宗像窯展示場入口の扁額

矢吹理事長（左）　宗像利訓さん（右）



翠彩掛分鶴首　宗像利訓作

2025年個展スケジュール

宗像窯 八代 宗像利浩展
井戸茶碗に魅せられて

会　　期
5月28日(水)～6月2日(月)
午前10時～午後7時［最終日午後5時終了］
会　　場
日本橋三越本店 本館６Ｆ 美術特選画廊
東京都中央区日本橋室町1-4-1

宗像利訓個展

会　　期
10月28日(火)～11月1日(土)
会　　場
Jalona 赤坂
東京都港区赤坂2-6-22

瑠璃壷　宗像利浩作

利鉢　宗像利浩作

井戸茶碗　宗像利浩作

宗像窯展示場

お問い合わせ

〒969-6127
福島県大沼郡会津美里町字本郷上甲3115
TEL. 0242-56-2174
FAX. 0242-56-3909
E-mail：munakata@w4.dion.ne.jp
URL：https://www.munakatagama.net/

初めて福島県を代表される作陶家のお一人である宗像窯八代目当主宗像利浩様にお会いしたとき、柔和な笑顔の先に、芸術家としての凛とした佇まい、表現者しての勁さ、想いを強く感じるとともに、畏怖の念を抱いた。

宗像窯の先祖である宗像出雲守式部は、767年（奈良時代）に福岡県宗像大社の神官として布教のため、旧会津本郷町（会津美里町）に移り住んで、宗像神社を建立し、代々神官を務められていた。1719年（享保）宗像窯を創業し、爾来当地にて300年以上に亘って、作陶を続けてこられた。2005年より宗像窯八代目当主を利浩様が継承され、近時は、ご長男の九代目宗像利訓様とともに作陶し、ニューヨーク、パリなど国内外で個展を開催されており、また奈良県の「東大寺」に抹茶碗を奉納するなど当地を代表する窯元である。

私は現在、株式会社東邦コンサルティングパートナーズの代表取締役社長として、主として事業承継をご支援しているが、会津本郷で300年以上続く宗像窯の継承について、八代目利浩様、九代目利訓様に直接お話しを伺い、事業承継に悩んでおられる経営者の方々に是非メッセージを頂きたいと考えた次第である。多年に亘る伝統文化の継承は、不透明で先の見えない現代にあっても、必ず示唆的な羅針盤のようなもの、先見の明があるはずである。

父から子へ、そして次の世代へと利訓様まで九代にわたって連綿と紡がれてきた。そこには、溢れるばかりの情熱、継承するという強い覚悟、そして作陶家としての矜持があった。また、利浩様、奥様、利訓様ご家族の絆、慈しみ、お互いに対する尊敬、強い家族愛があった。

ともすれば我々は、経済合理、収益性のもとに、さまざまなことを排除しているが、伝統文化の継承のために大切なことは、人としての情理や人と人との繋がり、時間そして「変革と挑戦」なのではないだろうか。

東大寺第224世別当にして華厳宗管長、橋村公英様との交流も、宗像窯様が、これまで大切に紡ぎ、繋がられてきたものがしっかりと伝わっているからではないだろうか。利浩様は、常に未来思考である。実直、誠実なお人柄、お仕事が、人と人のご縁を繋ぎ、未来に続いている。利浩様から、利訓様へ、「継なぐものから、継ながれるもの」への慈愛や想い、願いが、掌から掌へ確実に継承されている。

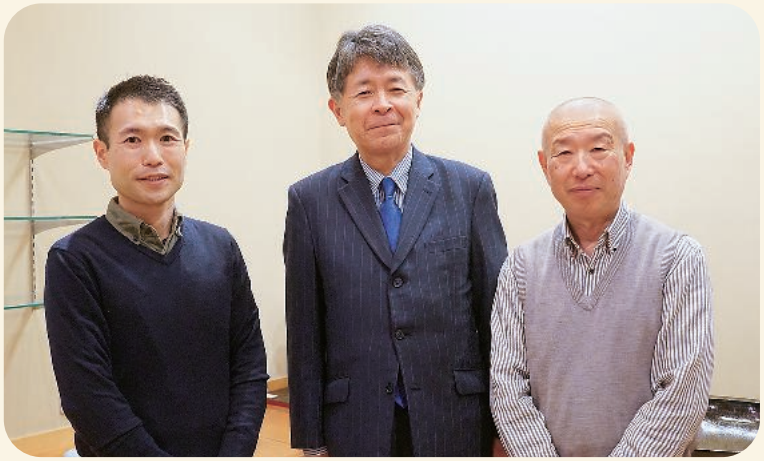
我々は今を生きるだけではなく、これからの未来への継承者としての役割も大きいことを改めて深く考えさせられた。とても楽しく、心躍るインタビューであった。

「会津本郷に生まれた作品が、福島から全国へ、そして世界へ羽ばたく」

宗像親子に心から敬意を表するとともに、これからの益々のご活躍を確信致しております。

この度は、誠にありがとうございました。

（インタビュー　矢吹　光一）



宗像利訓さん（左）　矢吹理事長（中央）　宗像利浩さん（右）